



AIとの付き合い方

福田 英嗣

東邦大学医療センター大橋病院皮膚科学教室准教授

医師としての経験が25年を超える中、社会は多方面にわたって変化を遂げており驚くばかりです。とくに、人工知能(artificial intelligence : AI)の進化は目覚ましく、とくに生成AI(generative AI)は、日常生活のみならず医療分野においても不可欠なツールとなっています。たとえば、医療分野では画像診断の補助や治療計画の策定、症例の要約作成などに活用され、創造的分野ではイラストや音楽の生成、金融・ビジネス分野ではリスク解析やコスト効率の予測、市場の需要動向の推定が可能となっています。また、教育・研究領域においても、図表の作成や学術論文の要約作成など、多様な場面で応用されています。

筆者自身、これまで生成AIに依存することは「考える力」や「発想する力」の衰退につながるのではないかと懸念し、積極的な活用を避けていました。しかし、先日開催された日本皮膚科学会総会の市民公開講座において、一般の方々への視覚的補助を目的とした画像提示の際、従来の方法では適切な画像の選定に長時間を要していましたが、生成AIを活用することで、短時間でより高品質な画像を作成・使用することが可能となりました。また、「新たな気づき」を与えてくれることもあり、最近はその時代の変遷に適応すべく、生成AIを少しずつ取り入れています。

利用の是非は「何を行うのか」「どのように活用するのか」という判断に依存します。つまり、適切に運用すれば有益な存在となる一方で、誤った使用はリスクを伴います。たとえば、学習データの偏りが誤判定を助長する可能性があり、医療AIによる誤診のリスクは排除しきれません。また、生成AIが生み出した創作物とオリジナル作品との境界が曖昧となり、著作権や倫理に関する議論が必須となります。さらに、特定の業務が自動化されることで、皮膚科医の診療技術の一端を担う視診が不要となる時代が到来する可能性も否定できません[実際は触診(指先の感覚)も重要な診断要素となるため、まだまだいまのところAIよりは優秀だと信じていますが……]。

若手医師にとって、生成AIの積極的活用は新たな試みにつながりますが、一方で、事実と異なる情報を生成する(ハルシネーション)こともあり、すべてを鵜呑みにすることで、誤った解釈に行き着くこともありえます。生成AIを適切に使うには、生成AIが導き出したデータや診断情報が本当に正しいのかを見極める力が必要です。その力を養うには、丁寧な日々の診療の実践と新しい知識の習得を継続していくことが大切です。

しかし、生成AIはあくまでもツールであり、その